

養父郡大屋町及びその周辺町におけるツツガムシ分布実態調査

— 福井医科大学協力事業 —

兵庫県和田山保健所衛生課

福住 昌明

大西 英剛

○馬場 吉平

1 はじめに

和田山保健所管内の養父郡大屋町の一部地域において、平成9年度秋季痒疹患者が多発し平成10年度においては全町に拡大した。また平成9、10年度においてそれぞれ1名のツツガムシ病患者発生の届出があった。このことからかなりのツツガムシが棲息しているものと考えられ、今後ツツガムシ病感染の拡大が懸念され、ツツガムシ病の予防対策についての取り組みが急務となった。そこで大屋町における秋季痒疹発症者の実態と、ツツガムシの棲息分布状況を調査し、ツツガムシ病発生予防対策の推進に資することを目的として大屋町を調査した。

なお、周辺の町においても同様のことが懸念され、痒疹症状者多発地域である大屋町南谷地域に面する山の反対側の状況等を広域的に把握するため、その部分に位置する養父町建屋周辺地域及び朝来町佐囊地域についても分布実態調査した。

2 大屋町の状況

養父郡大屋町は兵庫県内中国山地の最高峰氷ノ山(1,510m)の東南側に位置する農山村地域で、国道や、鉄道及び信号の存在しない過疎の町であり、以前は明延鉱山と共に栄えた町である。

3 調査方法

(1) 福井医科大学の協力のもと養父郡大屋町、養父郡養父町、朝来郡朝来町と共同実施した。

(2) ツツガムシ病を媒介するツツガムシが寄生(付着)している野鼠をトラップにより捕獲し、また黒布見取り法及びツルグレン法による土壌からの採集も併用して、町内のツツガムシの棲息分布状況を調べた。ツツガムシの同定等については福井医科大学に協力依頼した。

(3) アンケートによる秋季痒疹の発症実態調査及びツツガムシ病についての住民の意識調査を実施した。大屋町は平成9年度の南谷地域に局限した調査に引き続き、平成11年度は大屋町全戸配布(1617戸)に拡大してアンケート調査した。養父町は建屋地区及びその周辺地区全世帯(489戸)、朝来町は佐囊地域全世帯(178戸)を調査した。

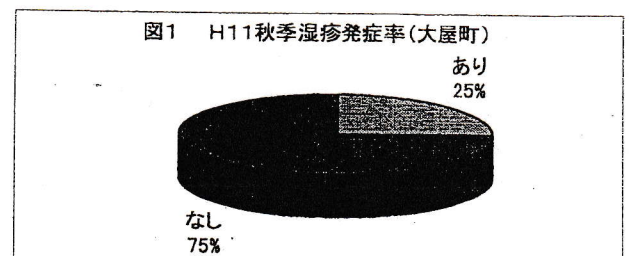
4 調査結果

現地調査結果

黒布見取り法で25c㎡当たり数10個体の密度でタテツツガムシが大屋町を中心とした三町で見出された。また捕獲したアカネズミや土壌からも同様にタテツツガムシが得られた。よって同町住民の皮疹は本種によるものと考えられた。

アンケート調査結果

平成11年度9月～11月の秋季湿疹発症率は、大屋町は町全体で25%に及んだ(図1)。養父町及び朝来町は、今回の調査地区全体でそれぞれ48%、33%だった。

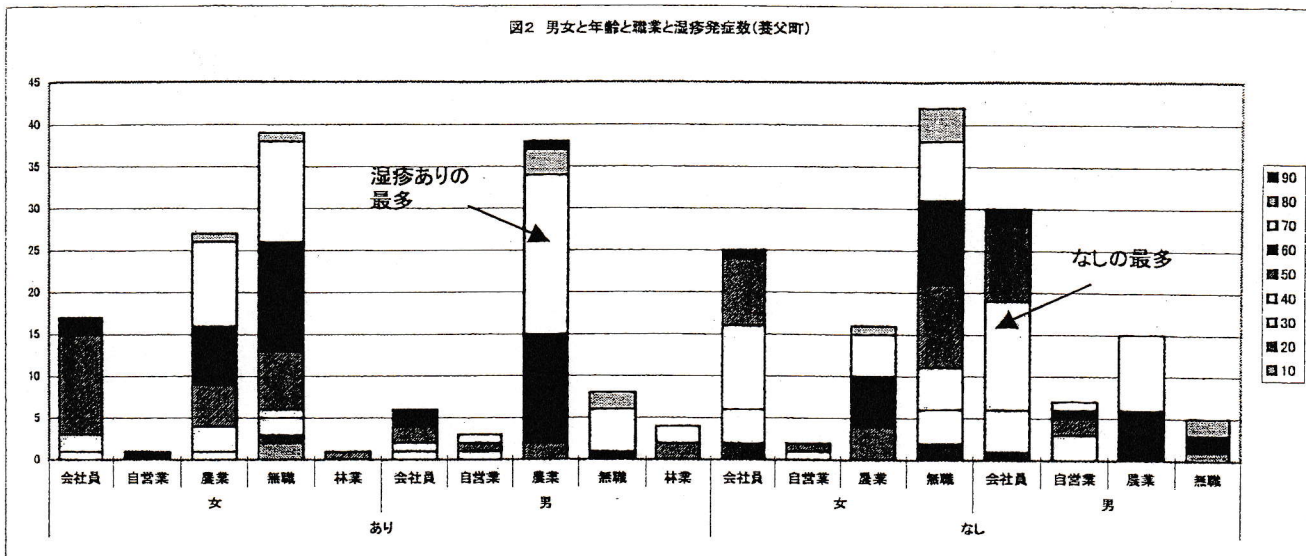


湿疹発症率を男女別に見ると、養父町は男49%女48%、朝来町は男32%女33%であり、いずれの町も男女の差はほとんど見られなかった。

養父町を例にとって湿疹発症の有無を男女及び職業及び年齢別に見ると、湿疹発症ありで最も多かったのは、男—農業—70代だった(19件)。

湿疹発症なしで最も多かったのは、男—会社員—40代だった(13件)(図2)。

図2 男女と年齢と職業と湿疹発症数(養父町)

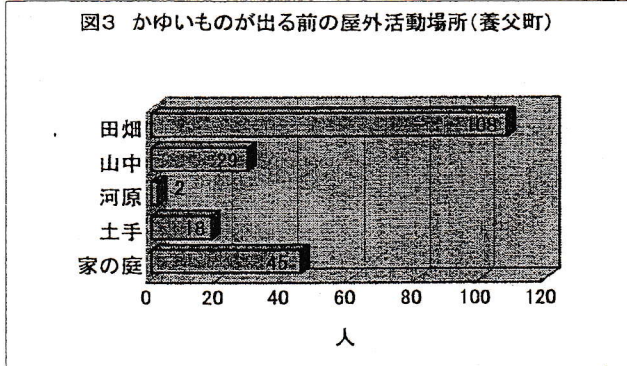


湿疹発症時期を月別に見ると、大屋町は10月が129件と最も多かった。養父町も10月が最も多かった。因みに平成11年度大屋及び朝来町のツツガムシ病の発病年月も10月だった。

湿疹発症前に農作業や草刈り、まつたけ狩りや庭いじり等何らかの屋外活動をしたと答えた人は、大屋町79%、養父町74%、朝来町58%だった。

湿疹発症前の屋外活動場所については養父、朝来とも田畑というのが最も多く、次いで家の庭が多かった。これは庭いじりをする高齢者が多いためと思われる(図3)。

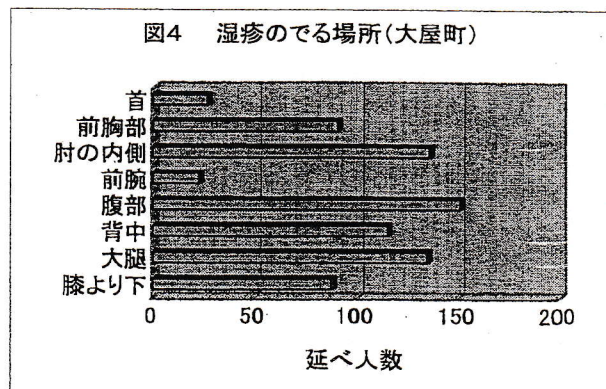
図3 かゆいものが出る前の屋外活動場所(養父町)



湿疹のでる場所は、腹部や肘の内側、大腿、背中等、体の中心に近い比較的柔らかい部分が多い(図4)。

大屋町はアンケート全戸配布以前に、ツツガムシ注意のチラシを同様に全戸配布しており、大屋町のアンケート様式だけ今回チラシの認知に関する問いを含んでいる。その結果湿疹発症者のうちチラシを読んだと答えた人は76%だった。大屋町

図4 湿疹のでる場所(大屋町)



及び医師を通して入手した集計データは、湿疹発症者に関するデータが主だったため、湿疹のなかった人のチラシ認知度については不明だが、大屋町湿疹発症者のうち、チラシを認知し、かつ屋外活動時にツツガムシに注意するようになり、かつ湿疹が減少したと答えた人は39%だった。

5 考察

アンケート配布が世帯に1枚のため、養父、朝来とも50～70代の回答が多く、世帯主である高齢者の回答が多かったことが予想される。また高齢者であるため無職が多く、農山村地域であるため農業従事者も多い。

湿疹発症率について、10月以前に大屋町保健センターがツツガムシ注意のチラシを全戸配布した直後にもかかわらず、大屋町全体で実に25%に及んだ。住民への引き続きの周知が必要である。

養父町及び朝来町の一部地域についても湿疹発症率はそれぞれ48%、33%に及び、これだけ多くの住民が何らかの湿疹に悩まされていることが判

明した。

大屋町立南谷診療所の馬庭医師によると、町の中心部や、より市街地の形態に近い地域より、山野等に隣接した地域の方が湿疹発症率が高い傾向があるとのことだが、今回のアンケート調査結果でもその傾向が見られた。すなわち、より山際等に近い方が、市街地に近い地域よりも土壌等に接する機会が多くツツガムシに接する機会が多いということであろう。

湿疹発症率に男女別の差は殆ど見られず、職業別だと農業や無職及び林業従事者が、会社員や自営業に比べて高率であった。湿疹発症の多かったのは、60～70代の男性農業従事者や60～70代の女性無職で、逆に湿疹症状のないのは、40～50代の男女会社員が多かった。これらは農業や無職の高齢者の方が、普段会社に通う人よりも農作業を始め草刈りや庭いじり等屋外で活動する機会が多く、それだけツツガムシ幼虫に肌を曝露する時間が長いことためツツガムシに噛まれる可能性が高いということだと思われる。

馬庭医師が八鹿病院誌に発表した文献によると、湿疹患者の発症時期は気温と密接な関係が疑われ、日平均気温が17℃を下回った頃に急に発症した、とある。これはすなわち、9月上旬というのはまだ暑いことためツツガムシ幼虫が活動を始めるにはまだ早く、急に肌寒く感じられるようになる10月初旬にかかる季節の変わり目にツツガムシ幼虫の活動が活発になるということである。同時に夏季のマダニに対する住民への周知等も必要であろう。

馬庭医師によると、マダニとツツガムシとの刺症を鑑別する一つの目安として、マダニによる刺症は体の末端部すなわち前腕部や下肢にでる湿疹がそれに該当し、腹部や肘の内側等比較的柔らかい部分にでる湿疹がツツガムシ幼虫によるものだという。今回のアンケートでもそれに近い結果が出ている。ツツガムシ幼虫が皮膚に付着してから噛むまでにある程度の時間があるといわれるが、これはツツガムシ幼虫の体長が微小であるため、皮膚の固い部分は噛みにくく、柔らかい部分まで移動するためではないかと思われる。

馬庭医師は、『大屋町南谷地域では10年以上も

前より秋季痒疹患者が多発しており、それに対して診療所医師は疑問を抱きながらも、2～3年で県派遣医師が交代するという過疎地の事情もあり、原因究明には至らず、地区住民の中では「ミナミダニ病」と呼称され放置されてきた。』と述べており、このことは医師及び保健関係者がツツガムシやその他ダニ類に起因する疾病に対して理解を深めることが必要であることを示している。

6 まとめ

今回の調査により大屋町が中国山地では初めてタテツツガムシの高密度浸淫地であることが確認され、またその周辺町においても同様の痒疹症状者及びタテツツガムシの存在が確認された。この現代社会において現時点でこれだけの人が原因不明の痒疹に悩まされているとはまさに驚きであった。

今回の調査結果に基づき管内医療関係者へのツツガムシ病に関する知識のさらなる周知、また町や住民へのツツガムシ病に関する知識や予防方法の周知徹底により、秋季湿疹発症者の減少を目指すべきだろう。

今回事業実施にあたり調査を依頼した大学を始め、各町や管内医療関係者との連携が図れた。これを機会により広域的に調査研究を行うためには保健所内においても、調査地域の人口動態や感染症の届出状況等、他課との連携が不可欠であり、調査方法及び技術の確立、器具の整備、そして調査能力の向上を目指すことが必要である。